ポ
ー
ラ
ン
ド
既
兄

RARY

90.4.27
ポーランド
岩・切
敏
91.1.27~90.4.26

NO. 7

ポーランド概況

平成２年４月２７日

JICA LIBRARY
J 1126319 [1]

ポーランド派遣企画調査員 岩 切 敏

SC

目　次

頁

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅰ．概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ．政治・外交情勢・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅲ．経済情勢・・・・・・・・・・・・・・・・・14

Ⅳ．一般事情・・・・・・・・・・・・・・・・・20

Ⅴ．観光案内・・・・・・・・・・・・・・・・・31

ＡＮＮＥＸ　１・・・国家機構図、政府組織図

ＡＮＮＥＸ　２・・・ポーランド経済統計年鑑（１９８９年）

［参考文献、資料］

「東欧の政治と国際関係」（有斐閣）　木戸　蓊　著
「東欧現代史」（有斐閣）　木戸　蓊・伊東　孝之　著
「ポーランド現代史」（山川出版社）　伊東　孝之　著
「ポーランド民族の歴史」（三省堂選書）　山本　俊朗・井内　敏夫　著
「ポーランド社会の弁証法」（岩波現代選書）　Ｊ．スタニシキス　著
「ワルシャワ物語」（ＮＨＫブックス）　工藤　幸雄　著
「ポーランド革命」（亜紀書房）　佐久間　邦夫・工藤　幸雄他　著
「ポーランド民主共和国」（日本国際問題研究所）
「ポーランド概要」　在ポーランド日本国大使館
「ワルシャワ案内」　在ポーランド日本国大使館

1126319 [1]

はじめに

９０年１月２７日から４月２６日までの９０日間、対ポーランド経済技術協力に関するニーズの把握と、研修員受け入れ事業等既に実施が決定されている案件の促進を目的として、在ワルシャワ日本国大使館に企画調査員として派遣された。

本小冊子は、当該期間に知り得た全ての情報を踏まえ、これまで、既に発行されている書籍や統計資料等をもとに、それぞれの項目に従って、小職なりにまとめたものである。ご存じのとおり、現在ポーランドを含めた東欧情勢は、政治、経済とも目まぐるしく変動しており、極端な話、ここにまとめた現状や数字が、もう既に過去のものとなっている可能性すら十分にある。そういった意味で、あくまでも本小冊子は、９０年４月１日現在に期限を区切った書き方にさせていただいたので、御了解願いたい。

ポーランドはヨーロッパという地域に所在しておりながら、現在、その国民の生活水準は極めて低く、また地政学上も、ドイツ、ソ連といった大国に挟まれ、かつ、地形的にも、何ら自然の要害がないこともあり、数々の試練を受けてきたことは、これまでの歴史が示しているとおりである。これは、ポーランドの国民性にも大きく影響を与えていると思われ、素朴であるという半面、外国（人）に対し、ある意味で懐疑的であるといった点に特に顕著に現れていると思われる。

また、比較的ヨーロッパの田舎といえるこの国にひっそりと暮らしていた一般の国民にとっては、ここ１０年間に起こっているドラスティックな変動に対し、これまで民族が培ってきた精神が必ずしも対応しきれず、大きなジレンマに直面していると思われる。

こういった情勢を理解した上で、小職としても、ＪＩＣＡとして協力しうる部分があれば、そのニーズを汲んで、可能な限り対応したいとの基本的姿勢でもって任務の遂行にあたってきたつもりである。

しかしながら、ＪＩＣＡ自身も東欧諸国に対する協力の経験を有しておらず、また、ポーランド側にとっても西側諸国からの援助といったものをこれまで経験したことがないという、いわゆる、初心者どうしの交渉であったため、相互理解に至るまでに相当の時間を要し、果してこの３か月間に、どれだけニーズを把握し、また、インパクトを与え得たか、正直申し上げて自信がない。さらに、小職のポーランド滞在は短かったこともあり、限られた人々との接触、あるいは、限られた場所の視察しか行い得ず、かつ、小職の力量不足も手伝い、この様な今後のＪＩＣＡの活動に大きく左右すると思われる報告書を上呈することは、非常にはばかられることであるが、誰かが手がけなければ始まらないことも確かであるから、とりあえず、今後の批判と修正を前提としつつ、あえて書き上げたものである。

なお、特に政治・外交情勢については、小職が日本大使館にいたこともあり、可能な限り政務担当者と協議を行った上でまとめたもので、既に一般に公開された情報をもとにしてはいるが、今後の日本・ポーランド関係についての若干予測的な部分にまで及んでいることもあり、本小冊子の取扱いには十分に御注意願いたい。

平成２年４月２７日
企画部地域第１課
岩　切　　敏

Ⅰ．概観

１．国土、国民

（１）位置

ポーランドは北緯４９～５５度、東経１４～２４度にまたがる中部ヨーロッパ北部に位置する（日本でいえば緯度はカラフト北部に相当）。

北部はバルト海に面し、東部はソ連、南部はチェコスロバキア、西部は東ドイツとそれぞれ国境を接している。

（２）面積

国土の面積は約３１．３万平方キロメートルで日本の国土の８０％に当たる（日本の国土面積から北海道を除いた程度）。

国土の利用可能な土地１８．９万平方キロメートルのうち、６０％が農用地（耕作地４６％、牧草地１３％、果樹園地１％）であり、２８％は森林地となっている。

（３）地勢

南部のカルパチア山脈を除き、国土の９割は３００ｍ以下の平坦地であり、緩やかな丘陵地帯を形づくっている。ポーランドという地名も、Pole（耕地、農地）に由来している。

南の国境は、２千メートル級の山々が国境を形づくっているが、東西の国境については地理的な障害物はほとんどなく、平原となっており、これまでの歴史が示しているとおり、ドイツやソ連から侵略を受け易い地形になっている。

ヴィスワ河が国土の中央を縦断し、オーデル・ナイセ両河が東独との国境線を流れている。

北東部は「湖水地方」と呼ばれ、大小たくさんの湖が点在し北欧的景観を成している一方で、南部から南西部にかけては西欧の田舎的景色が展開し、特にシュレジア地方は石炭や岩塩を産出することもあり、ポーランドにおける一大工業地帯を形成している。

（４）気候

気候は欧州西部の海洋性気候と東部の大陸性気候の影響を受け、一般に不安定で、夏期（６～８月）を除き寒冷である。

観光シーズンは４月から１０月までで、春は一斉に花や緑が現れ、秋はゴールデンオータムと呼ばれる程紅葉が美しく、同期間中は気候も比較的安定している。

他方、冬期は気候が不安定で、１日の内にも晴天と降雨・雪が同時に訪れることも珍しくなく、雷を伴った嵐が一日中続くこともある。

年間を通じての平均気温の較差は大きく、夏場は最高気温が３０度近くに上ることもあれば、冬場最低気温は－２５度とかなり冷え込む。

通常生活していく上では、主要都市については、屋内はほとんど集中地域暖房となっており各建物には給湯も行われ、何等問題はない。（近年かかる設備の老朽化が進み、お湯のなかに錆が混入し、生活用水として使用に耐えない地域が出てきている。）

＊なお、企画調査員が滞在した９０年２月から４月までの３か月間については、３年続きの暖冬ということで、南部の一部山岳地帯を除いて、積雪はなく、２～３月中旬までは、平均して最低気温５度前後、最高気温１０度前後、３月下旬以降については、最低気温１０度前後、最高気温１５～２０度前後と、かなり暖かかった。

（５）人口

８９年８月現在全人口は３，７９０万人を数えている。

［主要都市人口］

①ワルシャワ	１７２．６万人
②ウッジ	８４．２万人
③クラクフ	７３．６万人
④ヴロツワフ	６２．１万人
⑤ポズナン	５８．５万人
⑥グダンスク	４８．２万人
⑦シュチェチン	３９．１万人
⑧カトヴィツエ	３６．３万人
⑨ヴィドゴシュチ	３６．１万人
⑩ルブリン	３２．４万人

（６）住民

人口の約９８％がポーランド人という単一民族に近い国であり、少数民族としてウクライナ人、リトワニア人、白ロシア人、ドイツ人、ユダヤ人がいる（民族別人口統計は作成されていない）。
ポーランド人は９世紀の中頃、ヴィスワ河とオドラ河の中間地帯に居住していた、西スラブの一族ポラニエ（Polanie ）の子孫といわれている。

なお、国内のポーランド人の他、海外に居住するポーランド系移民は千数百万人といわれ、そのうち８４０万人が米国、８０万人がブラジル、７５万人がフランスに居住している（因みにソ連には１２０万人以上がいるといわれているが、実数は不明）。

現在、海外にいる著名なポーランド人としては、ローマ法王のヨハネ・パウロⅡ世、カーター元米大統領の特別補佐官をつとめたブレジンスキーなどがいる。
また、俗にポーランドは美人の産地としても世界中に知られ、８９年のミス・ワールドはポーランド代表であった。

（７）言語

西スラブ語であるポーランド語が唯一の公用語であり、これはチェッコ語、スロヴァキア語などと同系で、スラヴ語のなかでも最も難解な言語の一つといわれている。
英語については一部のインテリ層のみが話すことができ、日常生活にはほとんど通じない。義務教育の一環として小学校高学年からロシア語が教育されてきたが、連帯政権の発足とともに右制度は廃止され、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語の選択制となり、また、地域レベルでも、学校の授業とは別に語学教室が行われている。（しかしながら同時に、これまでのロシア語教師の余剰問題と、他の外国語教育にあたる教師の絶対数の不足は、かなり深刻な問題となっている。）

（８）宗教

最近発表された統計資料はないが、全人口の９０％以上がカトリックの洗礼を受けているともいわれ、その他少数のギリシャ正教、プロテスタント、ユダヤ教がいる。
従って、一般国民の精神生活に占めるカトリック教の地位は高く、グレンブ首座大司教・枢機卿を最高指導者とするポーランド・カトリック教会は一般信者の支持を受

けており、８９年９月に成立した連帯首班政府およびその直面する問題に対しては、支持と理解を示している。

政府と教会の関係は、７８年、クラクフのボィティワ枢機卿がヨハネ・パウロⅡ世としてローマ法王に選出された後、７９年、８３年、および８７年の同法王のポーランド訪問、８７年１月のヤルゼルスキ国家評議会議長（当時）のヴァチカン訪問等を通じ関係改善が図られ、８９年７月、長年の懸案であったコンコルダート締結（ヴァチカンとの条約締結）を契機に、東欧諸国の中で初めてヴァチカンとの外交関係正常化を達成した。

現マゾビエツキ首相、スクビシェフスキ外相、ステルマホフスキ上院議員等はカトリック知識人クラブに所属している。

（９）略史

（イ）王国の建設とピアスト王朝時代（９６６～１３８６年）

ポーランド建国は、９世紀の中頃、現在の大ポーランド地方に散在していた西スラヴ人諸族がポラニエ族の下に統合し、ピアスト(Piast) が王に選ばれた時と言われ、９６６年、ピアストの後しょうミエシコ(Mieszko) 王はカトリック教を正式に採用して、神聖ローマ（ドイツ）に対し独立を維持した。ミエンコの子ボレスワフ武勇王(Boleslaw Chrobry)は１６年間ドイツと戦い、漸く１０２５年西部国境を確定して、統一ポーランド王国の最初の王となった。当時、王都はグニエズノ(Gniezno 、ポズナンの東５３km）に定められた（因みに、現在のポーランド領はボスレワフ王時代の　図とほぼ同じである。）

その後ボレスワフ３世はバルト海沿岸地方、シレジア地方よりドイツ勢力を駆逐したが、その死後、その領土は３子に分割されたので国力は極度に衰えた。この間、蒙古軍がポーランドを攻撃したが、クラコフ侯ヘンリ王はこれをレグニッツァに迎え撃ち、これにより西欧は蒙古軍の蹂躙から免れた。

ヴァディスワフ王はクラコフを王都とした（１３２０）。カジミエシ大王はクラコフ大学を設立し、商業振興策としてユダヤ人を招き、国力の回復・充実に尽くしたが、跡継ぎがなかったため王の死とともにピアスト王朝は滅亡した。

（ロ）ヤギェウォ王朝（１３８６～１５７２年）

カジミエシ大王の甥で、ハンガリー王ルイがポーランド王となり、その後継者である王女ヤドヴィガ(Jadwiga) はリトアニア王ヤギェウオ(Jagiello)と結婚したた

め、リトアニアとポーランドは合併した（以後ポーランド王はリトアニア太公の称号を有することとなる）。

ポーランド・リトアニア連合軍は、歴史上有名なグルンヴァルト（タンネンベルグ）の戦いにおいてドイツ騎士団を撃破し（１４１０）、１６世紀末には、ポーランドは北はバルチック海より南は黒海に至る欧州最大の王国となった。

（ハ）選挙侯時代（１５７２～１７９５年）

１５１２年ヤギェウオ王朝の滅亡とともにポーランド王は貴族により選挙され、終身王位につくという一種の共和国となった。その結果、スウェーデン、ザクセン等隣国の王族がポーランド王に選挙されたが、これら選挙侯は国政運営に熱意がなく、かつロシア、プロシア、スウェーデン、トルコの侵攻により国力を失い、１７７２年の第１次分割、１７９３年の第２次分割、１７９５年の第３次分割の結果、露、晋、墺の３国に完全に分割統治されて、ポーランドは１２３年間欧州の地図より消え去った。

その間ジグムント３世は、１５９６年に首都をワルシャワに遷都した。

（ニ）ポーランド分割時代（１７９５～１９１８年）

１８０７年、ナポレオンはワルシャワ公国をプロシアから奪取した地域に樹立したが、ナポレオンの失脚とともに滅び、ウイーン会議（１８１５年）の結果、再分割され、ワルシャワ市を含む東部一帯は会議王国としてロシア帝国の支配下に入った。

（ホ）ポーランドの独立と第２次世界大戦

１９１９年６月、ヴェルサイユ条約により独立共和国として再建された。２６年５月ピウスツキ元帥は国内の政争を利用してクーデターによる軍事独裁をしいた。彼の死後（１９３５年）は依然として政争にあけくれた。この間、ポーランドは、１９３２年にソ連と不可侵条約を締結したが、３４年にドイツ、続いてソ連の侵入を受け、ポーランド政府はパリを経てロンドンに亡命した。

（ヘ）第２次大戦後

戦後の１９４５年６月、大戦中成立した親ソ臨時政府にロンドン亡命政権が参加する形で統一政府が組織された。４７年１月の総選挙で労働者党及び社会党が議席の大半をしめ、反共指導部の多くが亡命、弾圧され、独裁的支配を確立した。労働者党と社会党は冷戦を背景に４８年イデオロギー協調を行って合同し、統一労働者党が結成され、以後８９年９月のマゾヴィエツキ連帯主導内閣成立まで、事実上同党の１党独裁体制が続いた。

この間、ビェルート（４８～５６年）、ゴムウカ（５６～７０年）、ギエレク（７０～８０年）、ヤルゼルスキ（８１～８９年）及びラコフスキ（８９～）が、党第一書記に就任した。

ビェルートはスターリン主義的な支配を敷いたが、彼の死後５６年のポズナン暴動をきっかけに国民の民主化要求が高まり、ゴムウカが党第一書記に復帰したが、食料品の大幅値上げに端を発する７０年のグダンスク暴動により倒れた。ゴムウカの後を継いだギエレクの新政権は、粗放な投資等の経済政策の失敗から、８０年７月の食肉値上げ反対ストを契機に、同年９月更迭された。

８０年、ギエレクの後を継いだカニア第一書記は、同年８月の「グダンスク合意」を尊重する立場を取ったが、「連帯」運動の急進化に伴い国内の緊張が伴い、８１年１０月、軍人出身のヤルゼルスキ首相が党第一書記を兼任するところとなり、同年１２月、戒厳令導入に踏み切った。

ヤルゼルスキ政権は、８３年７月に戒厳令を解除し、８５年、首相を経済学者であるメスネルに譲った。メスネル首相は企業の活性化を図るべく新経済改革政策を発表し、その実現に努めたが、８８年９月、経済改革の失敗とスト続発の責任を負って退任した。ついで同年１０月首相に就任したラコフスキは国内の安定と社会の支持なくしては経済改革の実施が不可能であるとして、政治・経済改革をさらに推進したが、８９年６月の議会選挙の敗北の結果、同年８月に辞任した。後任のキシチャック首相は組閣工作に失敗し、８月１４日辞任を表明。

なお、同年４月の円卓会議の合意に基づき、大統領制が復活し、ヤルゼルスキ国家評議会議長が７月初代大統領に選出された。

Ⅱ．政治・外交情勢

１．国家機構

ポーランドの正式な国家名称は「ポーランド共和国」であり、最高国家機関として、上院、下院、大統領、閣僚会議（政府）があり、またその監督機関として憲法裁判所、国家法廷、最高監査院が存在する。（国家機構図及び政府組織図は ANNEX1 参照）

（１）国会：上院と下院の２院制であり、定数はそれぞれ１００名、４６０名、任期は共に４年。下院は国権の最高機関であり、首相の任命権等上院より大幅な権限を有している。

（２）大統領：８９年４月の円卓会議の合意に基づき大統領制が導入され、同年７月１９日の上下両院議員で構成された国民総会においてヤルゼルスキ統一労働者党第一書記が初代大統領に選出された。

大統領は、任期が６年で、国家元首、軍最高司令官を兼任し、戦時令、非常事態令の布告、下院解散権、首相候補の指名、立法提案権等広範な権限を有している。

（３）政府：政府は閣僚評議会と呼ばれ、首相と３名の無任所相を含め、計２４名の閣僚で構成されている。８９年６月の総選挙における連帯圧勝により、９月１２日、共産圏では戦後初めての非共産党勢力を主導とする政府が成立した。

首相は連帯のワレサ議長の側近であるタデウシュ・マゾヴィエツキ。

２．政治情勢

（１）円卓会議までの経緯

現在、ポーランドは約３９０億ドルに上る対外債務を抱え経済不振にあえいでいる。ソ連に先駆け、８２年から経済改革に踏み切ったものの成果が上がらず、その後ソ連のゴルバチョフによるペレストロイカ開始に刺激されて、８７年秋から経済改革第二段階施策案を作成、８８年２月から大幅な物価引上げを含む改革実施に移った。

しかしながら、この改革案は著しい物価増をまねいただけで、補助金削減等には実効が及ばなかった。８８年４月末及び８月末の２回にわたりストライキが起き、結局、

同年９月、経済政策の失敗の責任をとってメネスル内閣が退陣（かかる事例は東欧では最初）、１０月、ラコフスキ内閣が発足した。

かかる情勢を背景に、統一労働者党（以下「共産党」と略称）内でも、国民の支持がなければいかなる改革案も実効が上がらないため、経済政策の責任の一端を在野勢力にも負わせるべく連帯労組を再合法化して、広く国民の支持をとりつけるべしとする改革派の意見が台頭し、８９年１月の第１０回党中央委総会第２部会議において、政治的複数主義（在野勢力を体制内にとりこむ）並びに連帯労組を再合法化することが決定された。これに続き国民合意達成のため、８９年２月から４月まで円卓会議が開かれ、経済社会政策、政治改革、労組複数主義の３合意文書が採択された。

（２）政治民主化の進展、選挙実施、大統領選出

円卓会議での合意によって連帯労組が再合法化され、また、新たに上院（定員 100 名）と、強い権限を持つ大統領制が創設、議会（下院）の定員４６０名の３５％及びすべての上院の議席を自由選挙とすることが決定された。

８９年６月、上下両院の選挙が行われ、連帯の候補者は上院９９名、下院１６１名（定員の３５％相当）が当選、連帯の圧勝に終り、この結果、共産党は連帯の意向を無視して何等の決定もできないようになった。
連帯圧勝の原因として、連帯の優れた選挙戦術、教会の連帯支援、共産党側候補者の乱立、共産党側のキャンペーン不足、低い投票率等が上げられている。

紆余曲折の末、ヤルゼルスキ党第１書記が唯一の大統領候補者となったが、当選に最小限必要な２７０票をかろうじて獲得し、初代大統領に当選した。

（３）マゾヴィエツキ内閣の発足

当初ヤルゼルスキ大統領はキシチャク内相を首相候補に指名、組閣工作を行ったが、従来の与党たる統一農民党、民主党の反対で、従来通りの連立内閣ができなかった。逆にワレサ議長の工作が功を奏しマゾヴィエツキが首相候補に指名され、約１か月余りの組閣工作の末、閣僚ポスト２４のうち、連帯は１２ポスト（農相以外の主要経済閣僚ポストを含む）、共産党は４（国防、内務、対外経済協力、建設）、農民党も４、民主党３、独立１（外相）の顔ぶれとなった。

（４）最近の各政党の動き等

共産党は９０年１月２７日、党大会を開き、ポーランド共和国社会民主党（ＳＤ）と改名、新規約、プログラム宣言を採択、クファシニエスキ党首、ミレル書記長からなる若い世代を中心とする新指導部を選出し再生を図ったが、党員数は２百万から５千名に激減した。しかも党大会において党大会において党の分裂が明白となり、ＳＤに不満を持つフィシュバッフ下院副議長はポーランド共和国社会民主同盟（ＵＳＤ）を結成した他、共産党系全国労組連盟（ＯＰＺＺ）及び大部分の党議員は両党にも加入せず、事態の推移を見守っている。

この動きは他の政党にも波及し、連帯内でも今後労組として活動するのか、政治勢力として新たに政党を作り活動していくのかの基本問題が解決されておらず、対立が云々されている。この問題は４月１９日から開催予定の第２回連帯大会においてもとり上げられよう。農民党は農民党再生、農民党、農民党連帯に３分し、民主党も急進派の突き上げにより分裂の危機に瀕している。

（５）今後の見通し

○今後の国内政治の最大課題は、５月２７日に行われる地方選挙において、連帯が、国民の支持を得られるかどうかにかかっているが、経済状況の悪化、失業者の増大等、その見通しは必ずしも楽観できない状況である。

○民主化はテンポを早めており、上下両院選挙も近く実施される見通しであり、ヤルゼルスキ大統領も任期満了（９５年）以前の辞任を示唆している。

○現行憲法の抜本的改正の作業は９１年５月を目途に進められ、それまでの最小限の改正として、ポーランドを民主的法治国家と規定し（従来の「社会主義」を削除）、国名、国章（鷲に冠をつける）、共産党の指導的役割条項の削除、政党設立の自由保証等が行われ、これらの動きは各政党の離合集散を加速し、政治勢力を再編することになろう。

○予算削減等により、内務省、国防省の縮小圧力が高まり、企業等でのノーメンクラトゥラの整理と相俟って、共産党独裁の解体過程が進められ、従来共産党が享受していた各種特権の剥奪、減免税等の経済利権の廃止が進められよう。

○ＯＰＺＺ（公認全国労組）は依然７００万人の大勢力を誇っているが、その人気は

下落しており、孤立感を深めている。経済問題を巡り、連帯労組（８０年当時１千万を誇り、現在は２５０万）との対立が深まろう。

○第３の絶対的安定勢力として教会は無視できない存在。

○連帯以外の諸政党の支持率は１０％以下であり、マゾヴィエツキ政権に代わる政治勢力がない以上、とりあえずは、同政権が比較的安定した支持を保っているが、新経済政策が功を奏しなければ、半年後には国民の不満が爆発する可能性もある。

３．外交

（１）基本的立場

１９８９年９月、ポーランドにおいては非共産党の連帯主導内閣が成立した。従来統一労働者党が実質的に独占していた内閣は、対ソ積極協調を対外政策の重点としていたのに対し、新政権はポーランドが地政学上置かれている地位と社会主義体制の一員であるとの現状認識に立脚し、対ソ関係を重視しつつも、西側諸国との積極的協調策に転じた。

（２）ソ連・東欧諸国との関係

マゾヴィエツキ内閣以前のポーランド・ソ連両国間関係は両国首脳間の個人的親交を軸として友好関係が維持され、安定した基盤に置かれてきた。しかしながら、マゾヴィエツキ内閣成立を契機に、とくにソ連との関係はやや緊張したものとなるのではないかと見られた。しかし、新内閣はワルシャワ条約機構及びコメコンの加盟国としての国際的義務の遵守を謳い、これは、ソ連の従来以上の他国主権尊重、内政不干渉の原則尊重の傾向と相まって両国関係を安定的なものとしている。

（３）米国・西側諸国との関係

西側諸国との関係は、８１年１２月の戒厳令導入を境として悪化したものの、８３年７月の戒厳令解除、８４年７月の恩赦等を経て徐々に改善された。その後のポーランド情勢の急展開、特に８９年４月の円卓会議の合意に基づく「連帯」の再合法化を契機に、西側諸国は、ポーランドにおける改革の民主化、自由化への動きを支持・鼓舞する姿勢を示した。更に同年７月のブッシュ大統領のポーランド訪問、アルシュ・

サミット等における西側諸国のポーランドに対する支援は、精神的なものから、マゾヴィエツキ内閣誕生を機に具体化しつつある。

８９年１１月、ベルリンの壁崩壊等、東欧情勢の急展開を背景にして、コール首相のポーランド訪問が実現し、両国間で調印された共同宣言により和解と平和共存への方向が示され、歴史的転換点ともいうべき新たな段階に入った。

しかしながら同時に、第二次大戦以降に形成されたドイツとの国境問題については、依然として両国間の原則的合意がなく、また、東西両ドイツの統一問題がポーランドにとって相当な脅威となることから、ポーランド側に対し、大きな波紋を投げかけている。

（４）その他の諸国との関係

ポーランドにおける民主化の進展に伴い、諸外国との外交関係拡大が図られ、８９年７月ヴァチカン、９月ア首連、１０月カタル各国と、更に東欧諸国ではハンガリーに次いで２番目の国として韓国とも外交関係が樹立された。

また、９０年２月にはイスラエルとの間でも国交が回復し、実館が設けられた。

Ⅲ．経済情勢

１．概況

（１）戦前のポーランドは、他の多くの東欧諸国同様遅れた農業国であったが、戦後、重化学工業に重点を置いた政策を推進した。特に、６０年代から欧州において進展してきたデタントの流れにのり、西側の資金と技術の積極的導入を行った。

この結果、７０年代前半のポーランドの国民所得は急速に上昇した。しかし、その間、７３年に世界を襲った石油ショックの結果西側経済も停滞し、投資の結果できたプラントの製品は西側に輸出できず、対西側債務のみが急速に膨脹し、７８年頃から対外支払いに困難を生じ始め、８０年末には西側債権国に債務救済を要請することとなった。

それに伴い、生産国民所得の伸びも７９年以降マイナスに転じ、戒厳令が導入された８１年には、更にマイナス１２．１％となった。

（２）こうした経済危機に対し、旧来の中央集権的経済メカニズム自体にも問題があるとの観点から、ポーランド政府は、８２年以降（即ち、ソ連におけるゴルバチョフ大統領のペレストロイカ以前から）市場原理、競争原理の導入を柱とした経済改革を導入、実施してきており、８３年以降、経済は一応回復過程を辿ってきた。

制度面の改革としては、経済活動法（８８年１２月）による私企業設立の原則自由化、外資事業法（８８年１２月）による外資の積極的導入、その他貿易権限の自由化、中央経済計画部門の縮小、外貨取り引き規制の緩和等経済の自由化に向けて諸般の制度改革が実施されている。

（３）しかしながら、８８年以降の消費物資に係る市場原理導入に伴う物価値上げにより、賃上げストライキが続発し、その後８９年に入っても賃金と物価の悪循環によるインフレが強まり、鉱工業生産の伸びも再びマイナスに転じており、経済状況は悪化している。

（４）このような状況下にあって、連帯首班連立内閣の成立等に見られる政治の民主化が、経済危機により阻害、逆行することがあってはならないとの観点から、８９年７月の先進７か国サミットにおいても東欧支援問題が取り上げられ、８９年中頃以降、西側諸国は食糧支援等各般の経済支援策を策定、実施してきている。

また、ポーランドとしても巨額の累積債務に苦しむ中で西側諸国及びＩＭＦ・世銀等国際機関による一層の支援を求めるとともに、短期的にはインフレの抑制・通貨の

安定、中期的には経済構造の改善を目的とした経済プログラムを策定し、経済の活性化を図ることを目的としている。

２．鉱工業

（１）ポーランドの工業は、従来は、国内の豊富な石炭資源を基盤とし、輸入鉄鉱石を利用した鉄鋼業、機械工業、電気・電子工業などに重点が置かれてきたが、８１年１２月の戒厳令導入後の西側諸国の経済制裁による原材料、半製品輸入制約等のため、稼働率５～６割の状況に陥った。

その後、鉱工業生産は回復に向かったが、西側からのクレジットの制約もあり、生産設備の老朽化、製品の競争力減退を余儀なくされており、８８年の物価値上げ、賃上げストライキ等市場経済への移行に伴う混乱により、８９年第２四半期から再びマイナス成長に転じている。

（２）ポーランドの石炭業は、従来から、国内産業のエネルギー供給源として、また輸出産業として主軸的役割を果たしてきた。７９年には史上最高の２億３５０万トンの石炭を生産し、世界第４位の石炭輸出国の地位を固めたが、８０年以降の経済危機により、生産は急激に落ち込んだ。その後、１億９千万トンを産出するまで回復したものの、採炭の非効率化、労働条件の緩和等により、８９年の生産は１千万トン以上落ち込む見込みである。石炭業に対する補助金削減問題が議論の的となっており、今後の市場原理導入及び産業構造転換の鍵として注目される。

３．農業

（１）戦前（１９３１年）の農村人口は、全人口の約７０％を占めていたが、８８年には約４０％になっており、農業総生産が国民所得中に占める割合は、１２．５％（８８年）となっている。

ポーランドは国土の６０％以上が農業用地であり、その約８０％が耕作地であるが、農業用地の約８０％は私有地で、３７３万人が私営農民である。戦後、農業集団化の強行が試みられたが、農民の抵抗のため中止された結果、農業の集団化率が他のコメコン諸国に比べても極めて低いものとなっている。

（２）政府当局は、６０年代から７０年代にかけて、一貫して工業重視・農業軽視の政策を続けてきたため、農業における機械化と科学肥料投入が遅れ、戦前は農産品輸出国

であったものの戦後は輸入国に転じた。近年輸出入のバランスが改善されつつある。
主要な農産物は、小麦、ライ麦等の穀物類、馬鈴薯、野菜等であり、また畜産も行われている。

（３）しかしながら、農業・食品分野においても、経済改革の結果、市場原理の導入が進展しており、特に８９年８月から食肉配給券の廃止等本格的な自由化措置がとられ、食品価格が急激に上昇した。今後、農業の近代化と併せ、経済改革の円滑な実施のための基盤としての食料市場の動向が注目される。

４．対外収支

８２年以降、西側の経済制裁の影響もあり、輸入が抑制されたため、貿易収支は黒字を計上するようになった。また、海外からの労働者送金、国内ドルショップでの売上げ等の非貿易収支においても黒字要因があるものの、４００億ドルにも膨れ上がった累積債務の利払い義務のため、経常収支は赤字を続けている。

８０年代前半には、経常収支赤字幅の減少傾向が見られたものの、８９年には鉱工業生産の停滞、市場維持のための消費財輸入増の要因により貿易収支は悪化し、経常収支においても大幅な赤字が見込まれる。

５．債務問題

（１）７０年代後半に借り入れた債務については、第二次石油ショックに伴う西側諸国の経済停滞、戒厳令に伴う西側の経済制裁等の影響もあり、返済不能の状況に陥ったため、公的債務について、８０年代に入って、４次にわたり繰り延べが行われている。
しかしながら、繰り延べ分についての返済も進展していないため、西側諸国からの新規信用供与は停止して、ポーランド経済活性化の大きな足かせとなっていた。

（２）ポーランドは、８６年６月にＩＭＦ再及び世銀加盟を実現し、また、８７年２月には米国の対ポーランド経済制裁も解除された。
また、ポーランドとしては、経済改革を円滑に実施し、債務返済を図る上で不可欠な西側からの新規信用供与等の経済支援を要請してきた。
とりわけ、８９年４月の連帯合法化以降、西側諸国は、民主化支援の名の下に経済支援の姿勢を示し、８９年７月のアルシュ・サミットを契機に、対東欧支援策を具体

化しつつある。具体的には、食糧市場の危機打開のための食糧援助、私企業化に伴う経営管理のノウハウを教える技術協力等が検討され、一部実施されている。

（３）インフレの抑制、二重為替レートの統一、産業構造の改革等、困難な課題に対処するため、世銀やＩＭＦをはじめ、他の西側援助国の支援は、ポーランドの経済を活性化していく上で、大きな期待が寄せられている。

６．わが国との貿易関係

わが国のポーランドからの輸入は８０年まではその大半を石炭が占めていたが、８１年にポーランド国内の石炭生産が激減した結果、わが国に対する輸出も停止し、輸出額全体を引き下げることとなった。

以降、ポーランドの対日輸出は停滞しており、近年の主要輸出品目は、食料品（特にいか）となっている。

一方、わが国からポーランドへの輸出については、機械機器、金属品、化学品を中心とする重化学工業品が全輸出額の９割近くを占めている。

とりわけ、８８年には機械機器（中でもＶＴＲ関連機器、乗用車等）が急増した。

７．経済改革と経済現況

（１）経済改革

経済改革第２段階措置は８８年２月から大幅な物価引上げを強行して実施されたが、同年２回もの大規模ストを招き、メスネル内閣の退陣、ラコフスキ内閣の誕生となった。「ラ」内閣もレーニン造船所の廃止等の改革に手掛けたが、経済の悪化そのものに歯止めをかけることに失敗し、８９年第２四半期以降は原材料の供給不足、労働力不足による生産減少となった。また、準備のないまま、８月から実施された食料品経済の自由化と賃金物価スライド制の実施に伴い、８月以降の物価上昇率は月間４０～５０％という猛インフレとなった。

その後、マゾヴィエツキ内閣の努力により、物価上昇率の鈍化、市場への物資供給の増加に成功、やや改善の兆しを見せている。

（２）財政赤字の増大と国際収支の悪化

８９年の当初予算では、歳入１７兆ズオチ、赤字１兆ズオチが見込まれていたが、８９年１０月末現在の赤字は４．９兆ズオチに達し、このままでは年末で９．２兆ズオチに達することが予想された。マゾヴィエツキ内閣の歳出大幅削減により、赤字幅は１２月末４．７兆ズオチに圧縮することが目標となった。

他方、国際収支も、対ハードカレンシー圏貿易収支の出超が８８年に比べ激減、経常収支は８９年末、約２０億ドルの赤字が予想される（８８年末の経常収支の赤字は５．８億ドル）。

（３）対外債務の支払い猶予措置

ポーランドの抱える対外債務３９０億ドルの約３分の２は公的債務であり、８８年末までの債務については、８７年１２月パリ・クラブのマルチ合意を受けて２国間交渉が行われ、現在までに２、３か国を除くパリ・クラブ加盟国との間に支払い猶予合意が成立している。他方、約１００億ドルにのぼる民間銀行との債務についても、同様の支払い猶予合意が成立した。

ポーランド側は第５次支払い猶予（８９年以降の分）についても好条件での述べ払いを求め、また、新規クレジットの供与を要請していたが、９０年２月にパリ・クラブにおけるマルチ合意が成立した。

（４）ＩＭＦとの調整プログラム交渉の妥結

ＩＭＦからの約７億ドルにのぼるスタンド・バイ・クレジット供与を受けるための調整プログラム交渉は、８９年１２月２２日実質妥結、９０年２月５日ＩＭＦの正式承認がなされた。

また、世銀についても３．６億ドルの融資が決定された。

８．今後の新経済政策の概要

（１）中央指令型の計画経済から市場メカニズムの自由経済への移行は、インフレ高進の厳しい条件下に、今までどの国も経験したことのない歴史的実験として始まった。西側の支援は、その実施の必須条件であり、この経済の抜本的改革は長い期間を要し、かつ、国民に耐乏生活を強制するものであり、国民の幅広いかつ強力な支持がない限り成功はおぼつかない事業である。

（２）市中の流動性資金の国庫への回収のため、８９年中に２度に渡り、国債発行（各回５兆ズオチ）があった。今後は利子率の変更により、引き締めを行うこととなっている。

（３）８９年３月以降、外債の売却が各地の外貨交換所で行われ、公定レートの他に市場レートが生まれ、外貨交換は複数レートで行われてきたが、９０年１月以降は、市場レートを睨んだ公定レートが設けられ、そのレートは少なくとも３か月間は変更されない。これと平行して商業市場も存続され、公定レートと市場レートの差が１０％以上になった場合は金利操作等で市場介入を行う。そのため、わが国を含む西側の支援により１０億ドルの安定化基金が１月から設けられたが、３月初旬まで介入が行われることなく為替レートは安定している。

（４）価格の自由化が図られ、１月末までに家賃、自治体サービス及び交通料金を除き、すべての小売り価格は自由化された。卸売り物価は、石炭、コークス、電力のみ統制価格を残し、また、９０年末までに石炭、電力は国際価格まで引き上げられる。

また、１月中に消費物資、サービス価格は４５％上昇したが、その後は急速にインフレ率を減少させ、９０年末までの物価上昇率を９５％以内とすることを目標としている。（実際は、９０年１月の物価上昇率は対前年比約８０％増、対前年同月比約１２倍と急激に上昇した。その後はやや沈静化している。）

（５）この他、貿易関係の諸制限も緩和ないし撤廃され、賃金の引き上げは最小限とする税制上の改正措置もとられ、予算赤字を国立銀行からの貸し出しでまかなうことは許されなくなった。

９０年の予算も、黒字を計上するなど、超緊縮予算となっている。

（６）今後、市場経済への移行に伴う諸改革及び国営企業等の人員削減、生産性の効率化の名の下に、大量の失業者が生ずる可能性が高く、実際、世銀の２月の発表によれば、２月末現在で約１５万人を数えている。加えて、２月の政府発表によれば消費・生産ともに２０～３０％の落ち込み（対前年比）を記録しており、社会問題化していく可能性が大きい。

＊ポーランドの最新の経済統計資料はANNEX2参照

IV．一般事情

1．出入国に係る手続き

（1）入国

オケンチ(Okencie) 国際空港は、ワルシャワ市の南西１１kmにあり、市の中心部から車で１５～２０分のところにある。空港までの道路は渋滞もなく比較的スムースである。

入国手続きは、まず入国審査があり、旅券とビザを調べられる。外交旅券、及び、子供を連れた婦人用のカウンターは他の旅行客と区別されており、比較的手続きが早い。公用旅券については、一般旅券と同様のカウンターになる。

この後、荷物受取りカウンターで預託荷物の受取りを行い、税関検査に臨む。チェックは比較的簡単であるが、段ボール箱や特殊なトランクは目につき易く、検査の際開けるよう指示されることがある。

税関を出る前に、併せて外貨申請手続きを行い、申告書に担当官のスタンプを押してもらい、出国まで保管しておく必要がある。

（2）出国

チケットのリコンファームは必ず必要。ただし、チケットは必ずしも必要ではなく、氏名、搭乗期日、便名がわかれば可能。ホテルのカウンターでも代行してくれる。

出国の際は、出発時間の最低でも１時間前までに搭乗手続きを終える必要がある。

また、チェックインの際渡した自分のスーツケース等については出国手続き終了後改めて確認の上、荷物のコンベアーに自分で積み込まなければならないので、注意が必要。

外貨交換証明書（一般人＄１５×滞在日数、学生＄７×滞在日数）がない場合は、出国できない場合もある。また、外貨交換額は入国の際申請した額を越えてはいけない。

2．通貨

通貨の単位はズオチ(ZLOTY:ZL)。公定レートＵＳ＄１＝９，５００ＺＬ（９０年４月１日現在）。

両替の際は、必ず交換証明をくれるので（くれない場合は要求する）、宿泊手続きや支払いの際、提示を求められる場合があるので保管しておくこと。交換証明のあるポーランド貨は出国の際空港や国境において再び外貨に交換することができるが、レートの変動が大きいことや再交換の手続きに時間を相当要することにも鑑み、少しずつ交換していくことが望ましい。

現在ポーランドでは外貨の交換レートが統一されており（若干ホテルと町中の交換所ではレートの開きがあるが）、どこで交換しても同じことになっている。「KANTOR（カントール）」という両替所がいたるところにあり、銀行よりも一般的である。

主な紙幣と肖像は以下のとおり。（カッコ内は生存年月日）

１，０００ZL	コペルニクス（１４７３～１５４３）	天文学者
２，０００ZL	ミエシュコＩ世（？～９９２？）	ポーランド建国の王
５，０００ZL	ショパン（１８１０～１８４９）	作曲家
１０，０００ZL	ヴィスピアインスキ（１８６９～１９０７）	画家
２０，０００ZL	キューリー夫人（１８６７～１９３４）	科学者
５０，０００ZL	スタシッツ（１７５５～１８２６）	政治家
１００，０００ZL	モニウシュコ（１８１９～１８７２）	作曲家
２００，０００ZL	ワルシャワ市の眺め	

３．交通機関

（１）レンタカー

「ＢＵＤＧＥＴ」「ＯＲＢＩＳ（ポーランド国営の観光会社）」等のレンタカー会社があるが、車両保有絶対数が極めて少なく、少なくとも１週間前からの予約が必要。特にメルセデスクラスの車両確保は相当難しい。

このため、料金も西側と比べ、やや割高となっている。また、ワルシャワ市内での利用が原則となっており、郊外に利用した場合は倍近くの料金が要求される。長期滞在の場合は個人のタクシーと契約を結んだ方が無難。以下に４月１日現在の料金を上げておくが、当地のインフレ率に応じ、大幅な値上げが予想されるので念のため。

＊夏場（５～９月）は観光シーズンにあたるため、さらに車両確保が困難となり料金も割高となるため注意が必要。

	フィアット 1500cc	ポロネーズ 1800cc	フォード 2000cc	メルセデス 2000cc以上
1日間	216DM	281DM	420DM	650DM
1週間	846DM	1,124DM	1,703DM	2,850DM

（金額の単位はドイツマルク）

個人タクシーとの契約　　１時間あたり　３～５米ドル
月極で　４００～７００米ドル（１日あたり８時間）
＊車種により若干の違いがある。

（２）タクシー

タクシー・スタンドか電話（９１９）で呼んで乗ることができる。車の屋根にタクシーの電光文字がついているタクシー以外は乗らない方が無難。メーターは付いているがインフレ率によって×何倍かの料金が請求されるが、だいたいワルシャワ市内であれば２００００ＺＬから多くても５００００ＺＬ程度。また、ドル払いを要求してくるが、ズオチで支払うこと。

（３）市街電車、バス

市内どこまで乗っても４８０ＺＬ。ただし、急行バスは７００ＺＬ。
乗車券は、町中いたるところにあるルフ（ＲＵＣＨ）という名前のキオスクで、前もって購入しておく必要がある。

４．チップ

原則として不要。
レストラン等でも細かいつり銭を置いておく程度。サービスが気に入れば、この他に１ＵＳ＄程度を置くと喜ばれる。ホテルのベルボーイには、荷物の多少にかかわらず１００００ＺＬ、枕銭はその半分程度が目安。

５．郵便

切手や絵葉書はホテルの売店等で購入可能。

日本までの郵送に要する日数は１～３か月を見ておいたほうが無難。

ポーランドの切手は国外でも好評で、次々と新しい切手が発行されているが、未使用の切手の持ち出しは禁止されている。

６．電話

ポーランドの電話事情は劣悪であり、国際通話はもちろん、ワルシャワ市内でも通じない場合が多い。また、普通の家庭でも電話の加入率が低く、申し込みから２０年以上たっても入らないといったケースがオーバーな話ではない。

ホテルから電話をかける場合も、ほとんど通じないと思ったほうが良い。（通じた場合は運が相当良いと思っていただいてよい。）

大使館については特別な配慮がされているが、この場合でも５～８時間、申し込んでから通じるまでに時間がかかる。またＦＡＸはかかる事情から、ポーランドからの発信は困難で、受信のみが可能。通常はＴＬＸを日本の民間企業等は利用している。

国際通話の料金は、日本まで１分間あたり１０ドル。ただし、物価の上昇に伴い、今後も大幅に上昇する可能性がある。

７．電気

２２０Ｖ。

電気事情は、他の途上国に比べ比較的良いほうであるが、月に２回程度は３時間位の停電があることがある。原因としては、電線、変圧器等が老朽化しているにもかかわらず使用しているためで、何等かの外的要因で、電線が切断されたり、出力オーバーとなって送電がストップしてしまう。

工事等のため停電する場合でも、事前通知が全くないため、冷蔵庫に保管している食糧等をだめにしてしまうことがままあり、注意を要する。

８．水道

断水等は少なく、比較的安定的に供給されてる。

しかしながら、質の面では相当劣悪であり、PRONワルシャワ環境保護委員会の報告によれば、ポーランドの水質汚染は極めて危険な状態にあり、本来の水質を備えている湖は全体の３０％、河川については、わずか１％ということになっている。また、良質飲

料水が欠如しており、７０％の地下水が汚染されているとの報告も受けている。
現在の飲料水は、多量のカルキが含まれており、また、水道管の老朽化のため水中に錆が多く飲める状態ではない。時には、風呂や洗濯にも適さないような水が出てくることがある。

９．医療事情

ポーランドはヨーロッパの一部で寒帯に属しているため、風土病はないが、年間を通じて寒冷で、かつ空気が乾燥していることから、風邪をひきやすい。
当地の医療施設は状態が劣悪で、器具等の衛生管理が悪く、また、医療水準も低く、救急看護や簡単な応急手術程度しかできない。
このため、当地の在留邦人や外交団は、現地の病院をほとんど利用していない。ちなみに在留邦人は、緊急の場合は英国大使館医務官の診療室を利用し、その他の場合は、ウイーンや西ベルリンに赴き、適当な病院を利用している。
また、薬品についても、種類、量とも極めて少なく、また、期限切れになっているような薬品でも投薬している由。

10．治安

概して治安は良いほうであるが、近年の市場経済体制への移行に伴う経済の自由化により、貧富の格差が拡大し、金銭を目当てにした凶悪犯罪が急増している。
とくに、最近は、日本人を狙ったと思われる事件が続発しており、関係方面から注意を呼びかけている。

11．住宅事情

ポーランドの現在の深刻な国内問題の一つは住宅難である。
第２次世界大戦時に多くの住居が破壊され、その後の共産党政権下においても、住宅供給を進めたが、その数はあまりにも少なく、現在では２世代、３世代同居が大部分である。多くの住居はフラット形式で、２ＬＤＫか３ＬＤＫとなっている。
通常ポーランドでは子供が生まれると、国に対し一定の住宅基金を毎月納入し、２５年間で完納、即住宅提供という建て前になっているが、実際は２０～３０年も待たなければ住宅を得られない。

このため、外国人に提供するためのエキストラの物件は皆無で、外国に出稼ぎに出ている合間を利用したり、一家が無理して小さい部屋に住み、他の部分を貸与するような方式をとっている。（実際は、外国人相手であれば、ハードカレンシーで契約ができるため、数年間無理をしても貸与しているのが現状。）

大使館員の場合は、新聞で広告を出し物件を探しているが、これでも通常１～３か月程度の期間を要している。

家具付きの場合が多いが、大部分は老朽化しており、ベッド等の最小限度の物は自分達で、西側から調達している。

12. ホテル案内

観光客が近年急増しており、特に観光シーズンの４月から９月の間は事前に予約したほうが良い。ホテルは西欧並のデラックスホテルから普通のクラスまであるが、安全の面から、金額的にも高いホテルのほうが無難。

現在物価の急上昇を受けて、値段も月ごとに上がっている。

また、地方のホテルを利用する場合は、必ずパスポートあるいはＩＤカードの提示を求められ、無い場合は、宿泊を拒否されるので注意が必要。

［デラックスホテル］

○マリオット・ホテル

住所：ALEJE JEROZOLIMSKIE 65/79

電話：30-63-06

ワルシャワ市の中心部にあり、中央駅に隣接している、４０階建ての超近代的ビル。中には３つのレストラン、スカイラウンジバー、ディスコ、カジノがある。

１泊シングルで約１５０米ドル。

○ヴィクトリア・ホテル

住所：KROLEWSKA 11

電話：27-90-51

無名戦士の墓の前にあり、旧市街に近い。ワルシャワ市では、最も格式の高いホテルで、交通のアクセスが良い。

２つのレストラン、ナイトクラブと「ＰＥＷＥＸ」と呼ばれるドルショップがある。

１泊シングルで約１５０米ドル。

［上級ホテル］

○ホテル・ホリデーイン

住所：ZLOTA 2

電話：20-03-41

「科学文化宮殿」の西に面しており、ワルシャワ最新のホテルで清潔。

１泊シングルで約１３０米ドル。

［中級ホテル］

○ホテル・ヨーロペスキ

住所：KRAKOWSKIE PREDMIESCIE 13

電話：26-50-51

ワルシャワで数少ないナイトスポットが地下のナイトクラブにある。

１泊シングルで約１００米ドル。

○グランド・ホテル

住所：KRUCZA 28

電話：29-40-51

１泊シングルで約１００米ドル。

○ホテル・ソレッツ

住所：ZAGORNA 1

電話：25-92-41

小さいが安全で清潔。中長期滞在者向け。

１泊シングルで約８０米ドル。

○ホテル・ヴェラ

住所：WERY KOSTRZEWY 16

電話：22-74-21

１泊シングルで約６０米ドル。

13. ポーランド料理

ポーランド料理は一般的に脂っこく、塩味がつよいため、人により好き嫌いがあると思われる。一般的に豚肉はうまいが、鳥は脂がのらずそれほどでもないといった印象をよく耳にする。

ワルシャワを始め国内には日本料理屋はなく、「ボンセン」「メコン」という２軒のベトナム料理屋と「上海」というポーランド風中華料理屋が存在するのみ。

各一流ホテルにはそれぞれポーランド料理を中心としたレストランが存在するが、この他、「ヴィラヌフ」「ナポレオン」「クロコダイル」といったところがおすすめ。

（１）スープ

○ボルシチ：ビートから作られたポーランド固有のスープ。
○コドゥニ：ぎょうざのような具を浮かべたスープ。
○フラチキ：もつを煮込んだスープ。
○フオドニック：牛乳、赤蕪、ハムなどを使った冷たいスープ。

（２）肉料理

○タタール：生の牛肉に卵やねぎ、からしなどの香辛料を混ぜたもの。
○シャシリック：串刺しにした焼き肉にヴォッカをかけて火をつけたもの。
○子牛のカツレツ
○ビゴス：酢漬けキャベツ、肉、マッシュルームの煮物料理。

14. 主な物価（９０年４月１日現在、単位はズオチ、交換レート１米ドル＝9,500ZL ）

＊本統計は、企画調査員が独自に現地人の利用する市場に赴き、表示されている価格をテータノートしたもので、実際、外国人が利用する市場はこの価格の２～５割増程度。また、ポーランドにおいては、西ベルリンやウイーンからの生鮮食品等の買い出しも行われているが、その価格については、ほぼ西側の価格に輸送料が上乗せされる。

また、ポーランドの主要都市（地方の場合は一流ホテル内が多い）には「PEWEX 」（ペヴェックス）と呼ばれるドル・ショップがあり、酒、たばこの他、ミネラル・ウオーター、ジュース類、衣類、ＶＴＲやテレビ等の電気製品は入手することができる。

［食料品一般］

塩（１kg）	１，０００
砂糖（１kg）	４，９００
小麦粉（１kg）	３，６００
米（１kg）	８，０００
パン（0.5kg ）	１，６００

バター（0.25kg）	2，000
牛乳（1リットル）	3，200
卵（1個）	280
カテージチーズ（1kg）	6，300
チーズ（1kg）	10，000
食用油	5，000
牛肉（1kg）	17，000
豚肉（1kg）	24，000
鶏肉（1kg）	10，200
ハム（1kg）	45，000
トマト（1kg）	40，000
じゃがいも（1kg）	400
玉ねぎ（1kg）	1，000
にんじん（1kg）	600
バナナ（1kg）	15，000
オレンジ（1kg）	18，000

［その他］

ガソリン（ハイオク、1リットル）	2，400
タクシー料金1km	基本料金3，500
バス料金（1回）	480
長距離列車（ワルシャワ・クラコフ間 294km）	61，140
新聞	350
クリーニング（ワイシャツ1枚）	12，000
水道料金（1立方メートル）	1，500
電気料金（1キロワット時）	106．5
国際郵便（日本への封書、25g 以下）	2，200
国際電話（日本へ、1分あたり）	97，440
散髪（ホテルの場合、カットのみ）	20，000

＊当地での日本食料品入手は不可能。また、上記物資の入手については、時期により変動はあるも、とりあえず可能。ただし、何事にも長蛇の列で20～40分位は待たなければならない。

15．当地の諸経済事情

（１）大学卒の初任給（平均）

文科系・・・・・・・・・・８００，０００ＺＬ（約８０ドル）

理科・技術系・・・・１，０００，０００ＺＬ（約１００ドル）

＊この額は、現在政府機関や教員等に適用されているもので、労働内容により、若干の偏りがあると思われる。また、外国政府機関（大使館等）においては、この水準よりはるかに高く、因みに日本大使館の場合は平均その３～６倍程度。また、臨時に通訳や観光ガイド等で雇用する場合は、必ずしもかかる原則は適用されず、かなり高めになる。

（２）１か月の生活費（夫婦、子供２人）

約１００万ズオチ（約１００ドル）前後

＊これは、あくまでも企画調査員の限られた範囲の人間数人に聞いた調査結果であり、この限りではなく、あくまで最低限の生活を維持していける額と理解願いたい。

（３）調査団等で当地を訪問する際の旅費の概算

○車両傭上・・・・・前述３．（１）参照。なお、当地の車両の絶対保有量は極めて少なく、時期によって、相当価格の変動がある。（特に、５～９月の観光シーズンは割高。）

また、比較的安い個人タクシーの傭上も、場合によっては可能であるが、ドライバーが英語を話せない、保険の問題、車両の保守管理の問題等があり、あまり勧められない。

○通訳傭上・・・・・通常、日本語・ポーランド語の通訳はいない。（極小数はいるが、１日当たり１００ドル前後が相場。）英語・ポーランド語の通訳は、１時間あたり１５～２０ドル前後。

○国際電話・・・・・現在１分間あたり１０ドル前後。ホテル等では、若干のサービス料がこれに加算される。しかしながら、ほとんど通じない。

○コピー・・・・・・コピーが国民に解禁されたのもつい数年前であり、あまり普及していない。一流ホテルのビジネスセンターでもコピーする

には時間を要し、１枚あたり０．５ドル前後と、かなり高い。

○会議費・・・・・・会議費については当地は比較的安く、夕食時に一流ホテルを利用した場合でも一人あたり２０ドル前後で十分。しかしながら、外交団を除き、ポーランド人はあまり夕食時の招待を好まず、ワーキング・ランチとした方が、先方から受け入れられ易い。

Ｖ．観光案内

１．ワルシャワ市

ヴィスワ河のほとりにできたこの町は、９世紀頃から発展し、１３世紀末にはマゾフシェ公国の首都となり、更に１６世紀初め、同国がポーランド国家に編入されてからは急速に発展し、１５９６年、ジグムント３世が、南のクラクフからワルシャワに遷都した。

その後、スタニスワフ・アウグスト・ポニァトフスキ王（１７６４～９５年）の時代に、古代スラヴ的建築様式に西欧のネオ・クラシズム様式を織り込んだ多数の建物が増築され、市街は著しく美しくなった。

不幸にして、当時の文化的遺産の大部分は、第二次世界大戦中に壊滅し、今では、ベルヴェデル宮殿、ワジェンキ公園内の「水上宮殿」等がわずかに昔をしのばせるよすがとなっている。

第二次世界大戦中、特に１９４４年８月から同年１０月にかけて、６３日間にわたるポーランド義勇軍の反独蜂起（ワルシャワ蜂起）が発生し、この復讐として独から特別破壊部隊がワルシャワに来て、各ビルの１軒１軒をダイナマイトで爆破した。市内に火炎の絶える日なく、独軍撤退の後は無残な廃墟と化してしまった。

第二次世界大戦を通じて、市の約８５％の建物が破壊され、市民約８０万人の生命が失われた。約６００万人のポーランド人（半数はユダヤ系）の戦争犠牲者数は、その人口比率において世界一であり、市内いたるところにある犠牲者の小さな石碑やビルの壁に残されている弾痕が目につく。

今日の街はヴィスワ河の両岸にまたがり、人口約１６５万人、ポーランド共和国の首都であり、文化の中心地である。

（１）聖十字架教会

１７５４年建造、第二次世界大戦後再建。建物もさることながら、ここにはポーランドの生んだ世界的作曲家ショパンの心臓が安置されている。

ショパン（１８１０～４９年）はポーランド民族の受難時代（１８世紀末から第一次大戦までポーランドは露・独・墺の３国に分割されていた）、母国を思いながらパリで客死したが、その心臓は妹の手によって祖国に持ち帰られ、この教会に置かれた。

教会のはす向かいには、コペルニクスの銅像が立っている。

地動説を唱えたコペルニクス（１４７３～１５４３年）はポーランド人の誇りで、通貨の肖像にも用いられている。

この像は、１８３０年ポーランド国民が基金を集め、デンマークの彫刻家の手により作られたものである。１９４４年、ドイツ軍により撤去されたが、戦後シレジア地方で発見され再びワルシャワに移された。

（２）スターレ・ミアスト（旧市街）

中世ヨーロッパ風の市場を中心とする市街で、１９４４年に破壊されたが、外観を当時と変わらぬよう復元された。中央広場には、新鋭の画家達が作品を並べて売っている。また、旧市街にある商店には、ポーランドの民芸品が並べられている。

○ジグムント３世の銅像とザムコーヴィ広場

スターレ・ミアストに入る手前にある広場で、石畳が美しい。その中央にある、円柱形の台座の上にジムグント３世の銅像が立っている。彼は、１５９６年にクラクフ市からワルシャワに遷都した王で、銅像は１６４４年に建立され、第２次世界大戦中に破壊されたが、１９４９年に復旧された。

○聖ヤン教会

ザムコーヴィ広場からスターレ・ミアストに入る細い通りの右に建っている。
１４世紀初期に建てられ、１５世紀後半に拡張された。

○バルバカン

昔のワルシャワは二重の城壁と壕によって外敵の来襲に備えていた。内壁は１４世紀後半、外壁は１５世紀初期に築かれ、２つの門によって城外と城内の交通の取締を行った。その門の一つがバルバカンと呼ばれ、敵の来襲に備え、銃眼、落とし穴、水攻め等の設備を持っていた。建築様式は、十字軍遠征時代にアラブより伝えられたと言われている。

現存のものは、戦時中破壊されたのを１９５０～５４年にかけて復元したもの。

（３）キューリー夫人の生家

バルバカンを出て２００メートルくらい行った右側にキューリー夫人（１８６７～１９３７）の生家がある。

入り口の右の壁に「１８６７年１１月７日、ここにマリア・スクスウォドフスカ・キューリー生まれる。１８９８年、放射性元素ポロニューム及びラジウムを発見する」と書いたプレートがはめ込まれている。

中は３階建てになっておりキューリー夫人の研究に使った道具や日用品等が展示されている。

（４）ワジェンキ公園

１８世紀後半、スタニワフ・ポニャトフスキ王の時代に造られたもので、以前は貴族のための狩猟場であったと言われている。約８０ヘクタールの広さで、５月の若葉、１０月の紅葉は美しい。

公園の西側にはショパンの像があり、５～９月の日曜日、この側でショパンの作曲した曲のピアノ演奏会が開催される。

北の一角には、１９世紀初め、仏王ルイ１８世が亡命の身を寄せた「白い家」と呼ばれる建物がある。

公園の中央には、スタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ王がポーランド滅亡（１７９５）の直前に建造した「ワジェンキ宮殿」、通称「水上の宮殿」がある。イタリアの建築家ドメニコ・メルリーニの設計したもので、ネオ・クラシック建築の代表的建物で、勝つ、最も優美な建物と言われている。室内装飾はポーランド人の彫刻家や画家の手によるもので、特に「ソロモンの間」と「白い間」が美しいとされている。

東側には島を有した池があり、その島の中にはポニャトフスキ王が建てた野外劇場がある。舞台は、古代ローマの破壊された建物の残骸を真似てつくられており、観客席は対岸にある。

（５）シレナの像

ヴィスワ河のほとりに、右手に剣、左手に盾を持った人魚像（シレナの像）が立っている。これは、ワルシャワ市の起源をめぐる伝説をもとに、１９３９年、ワルシャワの守護神として造られた。ワルシャワ市のマークになっている。

（６）ゲットーの跡

もともとユダヤ人街として昔から知られていたが、第２次大戦中、ナチス・ドイツ軍がここをユダヤ人の強制収容所とし、一時は約５０万人のユダヤ人がここに収容されていたと言われている。そのうち、３０万人は１９４２年にオシフェンチム（ドイツ語ではアウシュヴィッツ）やマイダネック等の死のキャンプに送り込まれ、残りのユダヤ人達も翌年春、ドイツ軍に反抗を試みて失敗、大部分が殺害され、残ったのはわずか２百人であったと言われている。

（７）文化・科学宮殿

ソ連がポーランド人民への贈り物として、市の中心部に建設した、高さ２３４ｍ、４４階、3288室という巨大な建物で、１９５２年に着工、５５年に完成した。

この宮殿はスターリン趣味の高層建築で、モスクワにも類似のものがいくつかあるが、そのうち、比較的評判のよいモスクワ大学に模した設計で、正面玄関の左手にはミツキェヴィッチ、右手にはコペルニクスの像が立っている。

中には、ポーランド科学アカデミー学術研究所、各文化団体事務所、テレビ放送中継所、技術博物館、コングレス・ホール、劇場、映画館、レストラン等がある。

最上階には展望台があり、エレベーターが直行している。

（８）ベルヴェデル宮殿

１８２２年建設、戦後修復し、現在は国家元首にあたる大統領官邸となっている。

在ポーランド各国大使の信任状捧呈式はここで行われる。

（９）ショパンの生家

ワルシャワ市の西約５０kmのところにあり、当時のままに復元されている。ショパン一家は、ショパンの子供の頃にワルシャワに移り住んだが、ショパン自身は、その後もこの地を良く訪れたと言われている。

５～９月の日曜日には、ここでショパンの曲のピアノ演奏が行われる。

２．クラクフ市

ワルシャワの南３００kmにある人口７４万人の都市で、１４世紀から１７世紀まで、ポーランドの首都であった。ポーランド全土が戦火に包まれた第二次世界大戦中、この町だけが戦災をまぬがれ、貴重な文化財が救われた。

（１）バベル城

ゴシック・ルネッサンス様式で、町を見下ろす丘にそびえるこの城は、ポーランドで最も美しい城と言われている。国宝級の品々を多く有しているが、なかでも武器類やゴブラン織りのコレクションはすばらしい。

また、城の丘の下の洞窟には、昔、美しいクラクフの娘達をさらったといわれる、目から火をふく龍の像がある。

（２）聖マリア教会

国宝である聖壇が素晴らしく、この教会の塔の上で、毎時間毎に故事にのっとったラッパの演奏が時を告げ、これは時報としてポーランド国内で放送されている。

（３）中央市場広場

ほぼ正方形の４万平方メートルに及ぶこの広場は、ヨーロッパのこの種の広場の中では、最も美しい内の一つと言われている。広場の中央には、土産品店が並ぶスケンニッツェと呼ばれるルネッサンス様式の建物と、旧市庁舎の高い塔がそびえている。

（４）ヤギエオ大学

１３６４年の創立でコペルニクスをはじめ、世界的な学者を輩出している。校舎の中でもクラクフ・アカデミーの建物はヨーロッパに現存する３つの中世の大学建造物として有名。

３．オシフェンチム

クラクフの西方約６０㎞にあるナチス・ドイツのユダヤ人収容所跡で、世界的にはアウシュヴィッツというドイツ語読みで知られている。

１９４０年から５年間の間に、この収容所だけで、４５０万人のユダヤ人の命が失われた。有刺鉄線がはりめぐられられ、収容所跡のほか、ガス室、死体を焼いた焼却炉などがそのまま残されている。

入り口には、「アルバイト・マハト・フライ（働けば自由になれる）」と書かれた標語が刻み込まれている。

ワルシャワの南東約１６５㎞のルブリン市の郊外にもマイダネックという収容所跡が当時のまま残されている。

４．グダンスク

バルト海に面する都市では最も古い歴史を持ち、ドイツ占領下時代には、ダンチヒという名で呼ばれていた。現在は、戦災前の町並みに完全に復元されていて、中世の町が再現したかのような古色を帯びた独特の石造りの家や石畳、ゴシック様式の教会などが建ち並び、ハンザ同盟時代からの商工業都市として発展した様子がしのばれる。

LIB